北海道 シマフクロウ通信

特定非営利活動法人 北海道シマフクロウの会　機関誌

第31号

コミミズク
海岸に近い荒地でハンティング
（撮影　田村康教）

エゾフクロウ
枝葉をよけて飛行する

シマフクロウ
広い空間のある
川面を飛行

シマフクロウの生態

フクロウ類の飛び方 パート2

シマフクロウ保護・研究家　**山本純郎**

会報 18 号でも紹介しましたが、今回も飛び方について書きたいと思います。フクロウ類には 250 種あまりのたくさんの種類があって、日本だけでも 12 種類が記録されています。飛翔は音もたてずに飛ぶ種類が大半です。その中で最も軽々と無音で飛翔するのが、メンフクロウの仲間です。日本ではヒガシメンフクロウが西表島で一度確認されています。残念ながらこのヒガシメンフクロウの飛翔は見ていませんが、親戚にあたるメンフクロウは見たことがあります。Barn Owl（ナヤフクロウ）と呼ばれ文字通り納屋でよく営巣するフクロウです。なぜ納屋が多いかというと納屋に付きものの ネズミがいるからです。このメンフクロウの飛翔は、無重力で浮かんでいるかのようにフワフワと飛行し、サッと地上に降りるとネズミを掴んでいます。これに近いのがコミミズクとトラフズクです。大きさもメンフクロウと変わりません。どちらも同じようなハンティングスタイルです。またこの 2 種類は渡りも行います。アオバズクも渡り鳥ですが、前記の種より軽々と飛行することはないですが、飛行速度は速く方向転換も俊敏です。英名は Hawk Owl と呼ばれるとおり、小型の鷹のようです。コノハズクの仲間は 3 種いますが、直線的に飛行します。飛行速度はあまり速くないです。エゾフクロウの尾羽は長く翼は短くて幅が広いです。この形態のフクロウは狭い林の中でも小枝を縫ってスイスイと飛行することができます。大型のシマフクロウは、はっきり言って飛ぶのは下手です。長距離の飛行は滑空と羽ばたきで、見ていれば優雅ですが、ちょっと狭いところでは、翼をかなり枝等に当てています。だからシマフクロウは広い空間のある原生林を好むわけです。フクロウ類の飛び方は棲んでいる環境、餌の獲り方で違いが現われます。

もうすぐ標識調査が始まります。今年もたくさんの幼鳥が生まれるといいです。

写真：山本純郎

事務局便り

● 今回は、コロナ禍の状況に鑑み、シマフクロウ保護活動支援金贈呈式･記念講演会等の開催に代えまして、受贈者のうちお三方から、日頃のシマフクロウ保護活動の状況等についてご寄稿をいただきました。

●賛助会員・寄付を募集しています

当会の活動趣旨にご賛同いただける法人・個人の皆様の賛助会員ご入会とご寄付を募集しています。
当会のホームページから手続きができるようになっておりますので、ぜひご覧ください。

【認定 NPO 法人北海道シマフクロウの会　事務局】（担当：来谷・久保木）
〒060-8640 札幌市中央区大通西 3 丁目 11 番地 北洋ビル 6 階　㈱北海道二十一世紀総合研究所 内　TEL 011-231-8681　FAX 011-231-8683
URL：https://hokkaido-shimafukurou.org/　E-mail：info@hokkaido-shimafukurou.org

令和 4 年 5 月 25 日発行／発行：認定 NPO 法人「北海道シマフクロウの会」／印刷：株式会社ほくでんアソシエ／誌面デザイン・DTP：中島祥子

民有地のシマフクロウを守るために

公益財団法人日本野鳥の会　自然保護室　苫小牧グループ　チーフ　**松本潤慶**

日本野鳥の会では、シマフクロウの絶滅を防ぐため、開発の恐れのある法的な保護の網かけが弱い民有地を対象として、土地の購入や所有者との保全協定により独自の「野鳥保護区」を設置して保全しています。シマフクロウの生息地全体を保全することで、他の動植物の生息地も守ることができるため、森林の生物多様性向上に寄与する活動です。当会では、環境省の保護目標である 100 つがいの 1/4 にあたる 25 つがい分の生息地保全を目指しています。2004 年の事業開始からこれまでに合計 14 つがいが利用する 1,600ha 以上の民有地を保全することができました。

生息地の保全は野鳥保護区を設置して終わりではありません。これらの野鳥保護区では、環境省や研究者の方々にご協力をいただき、現地調査も実施しつつシマフクロウの繁殖に適した環境づくりを行なっています。野鳥保護区を利用するシマフクロウの中には、河川の魚など餌が不足して繁殖成功率が低いつがいのほか、樹洞木の不足など、繁殖環境が不十分なつがいも確認されています。このような野鳥保護区では、生簀を設置して魚を補填する給餌や、新たに巣箱を設置するなど、今生息しているシマフクロウを守るための緊急措置として子育て支援を行なっています。

また、森林環境に目を向けると、野鳥保護区にはまとまった面積の森林がありますが、中には人工針葉樹林や伐採跡地も残っています。森づくりには時間がかかりますが、これからは将来のシマフクロウが利用できる森を目指し、地域の方々とも協力して豊かな針広混交林へと復元する保全管理も実施していきます。

このような保護活動を継続して実施するためには、シマフクロウのことを多くの方に知っていただくことも大切です。そのため、シマフクロウの生態や現状、保護活動について伝えるため、当会のネイチャーセンターでの展示や講演、小冊子「こんばんはシマフクロウ」を作成して配布する活動も展開しています。

土地の購入から調査、給餌、巣箱の設置、森づくり、そして皆さんに伝えることなど、シマフクロウ生息地保全のための活動は多岐にわたります。これらの活動は、一般の方や企業の皆さまからのご寄付、所有地の保全協定、そして調査などへの技術支援によって支えられています。今回貴会からいただきましたご寄付も、民有地におけるシマフクロウの生息地保全活動に活用していきたいと思います。引き続き、ご支援をよろしくお願いいたします。

「こんばんはシマフクロウ」についての詳細はこちら

日本製紙株式会社と協定を結んでいる野鳥保護区

餌不足の時期を中心に給餌しています

小冊子「こんばんはシマフクロウ」

シマフクロウ保護活動支援金　受贈者活動報告

シマフクロウ保護活動家　**田村康教**

私は 2017 年から私的調査と公共事業において保護増殖事業等でシマフクロウに関わらせて頂いております。

さて、私的調査の機会は個人でもシマフクロウの保護に取り組みたいと考えていたところへ恩師である山本純郎さんから、とある場所でのシマフクロウの確認情報をお聞きした事に始まります。調査を開始したのはいいものの、やはりそう簡単にはシマフクロウを見つけられず、日中からあくる日の朝まで山を彷徨う日もありました。そうして 1 か月半ほど山へ通って足跡を見つけたときは興奮したのを憶えています。帰宅後すぐに山本さんへ連絡したところ、大変喜んで頂きました。

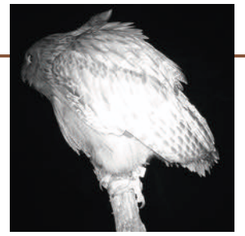
個人調査は個体識別と生息地の環境把握を主な目的にしているため、野山を歩きシマフクロウを探しながら、餌になるもの、採餌・休息に利用しそうな場所、営巣できそうな樹木の確認に努めております。意外な発見があったのは、ある河川流域に生息しているシマフクロウはウチダザリガニをよく捕食していることでした。

調査を継続して分かったことは、フィールドワークを長年続けてきた私でもシマフクロウを見つける機会は非常に少なく、さらに極力影響が少ないように足環を読み取るのは困難だということでした。そのため、レコーダーや自動撮影カメラ等が必要と考え、頂いた保護活動支援金を調査機材の補強として有効に使わせて頂いております。

フィールドワークには常に危険が伴うものです。季節によっては長距離歩行での足の骨折は命取りになりますし、ある時は斜面で土壌が崩れて滑落する寸前の時もあり、またある時はササ藪の中、近距離でヒグマに威嚇されました。冬の夜に川を渡る際、氷を踏み抜いてしまい腰まで水に浸かったこともあります。

単独調査は自費で継続しているため、残念ながら経費が嵩んでいます。そんな時北海道シマフクロウの会から保護活動支援金を賜る事となりました。ご支援を頂いたシマフクロウの保護に関心がある皆様と北海道シマフクロウの会の皆様には大変感謝しております。また、恩師である山本さんには、およそ 20 年前から現在もシマフクロウの生態について多くをご教授頂き大変感謝しております。

この場をお借りしてお世話になっている皆様に厚くお礼を申し上げます。



自動撮影カメラの画像

自動撮影カメラの画像

足跡

巣箱は架けて終わりではなく、その後のメンテナンスも大事な作業（2021 年知床にて）

幼少期から身近にあったシマフクロウの保護活動に携わる

ニムオロ自然研究会　**髙田令子**

私はシマフクロウ保護・研究家である山本純郎氏と同じ根室市に住んでいます。自然好きの両親の影響を受け、野鳥観察などを親しみながら育ちました。進学のため一時は北海道を離れましたが、都会の暮らしは性に合わずとすぐに地元へ戻り、以後は主に鳥類調査を職業とし、時には自然保護問題などにも取り組んでいます。生息地に近い場所に住み、父も環境省の保護増殖事業などに携わっていたため、幼少期からシマフクロウの保護活動の一端を見て育ちました。2003 年頃より、シマフクロウ研究者の竹中健氏を手伝う形で調査研究や保護活動に携わっています。

竹中氏を手伝うようになり、北海道内のみならず国後島やロシアなど、様々な環境で生息するシマフクロウを観察する機会を得ました。調査の基本は、現地でシマフクロウの声を聞き、痕跡を探して生息状況を把握することですが、竹中氏からは様々な機材を活用する調査手法も学んでいます。巣内での産卵から雛の巣立ちまでの生態を観察するため、繁殖に影響を与えないようケーブルを数百メートル延ばした林内に、録画機と電源用の車用バッテリーを運び続けたこともあります。その際に運搬したバッテリーの総重量は 3 トンを超えました。音声レコーダーを活用することで、同時に複数地点で長期間のデータを取ることが可能になり、調査の効率性を上げることもできています。エサ資源を把握するための魚類調査にも同行します。最近では、巣箱のメンテナンス等のため木に登る機会も増えました。

竹中氏の調査を手伝い始めた頃、ザックの中身はバッテリー（2005 年知床にて）

少しずつ増加の兆しが見えてきたシマフクロウがより安定的に生息できる状況になるには、まだまだ長い年月がかかります。体力的には年々辛くなってきますが、次世代への引継ぎも意識しながら、これからもシマフクロウの保護活動に貢献できればと思います。そして、北海道シマフクロウの会のご支援に感謝申し上げます。

2003 年国後島での調査、再びこの地で調査できる機会はあるだろうか…